

高等学校「歴史総合」における教材としての オリンピック史の可能性

——生徒の自由記述に対する計量テキスト分析を通して——

藤 川 和 俊
鈴 木 広 平
渡 辺 寛 之

高等学校「歴史総合」における教材としての オリンピック史の可能性

——生徒の自由記述に対する計量テキスト分析を通して——

藤 川 和 俊
鈴 木 広 平
渡 辺 寛 之

The Potential of Olympic History as Teaching Material in High School “Modern and Contemporary History”: A Quantitative Textual Analysis of Students’ Free Responses

FUJIKAWA, Kazutoshi
SUZUKI, Kohei
WATANABE, Hiroyuki

Abstract

Following the 2018 revision of Japan’s Curriculum Guidelines by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology, “Modern and Contemporary History” was added to high school geography and history courses as a compulsory subject. This subject is expected to support integrated learning of Japanese and world history, while also connecting historical study to contemporary issues. However, it has been reported that some teachers feel uncertain about creating specific questions and selecting historical materials pertaining to this subject. Therefore, practical research is required. This study aims to examine the potential of Olympic History as teaching material in Modern and Contemporary History. The Olympic Games are both familiar and relatable to students, offering temporal and spatial breadth as well as strong connections to key events in modern and contemporary history. Furthermore, they highlight contemporary issues without offering straightforward conclusions, making them an effective subject for fostering inquiry-based learning. This study implemented a three-lesson unit for 175 second-year high school students. Following the lessons, various aspects of students’ learning were examined through quantitative text analysis using

KH Coder on the worksheets completed by the students.

The analysis identified the following three points as the potential of Olympic History as teaching material:

- 1) Olympic History—where inter-state rivalries coexist with individual athlete actions—prompted a multifaceted examination of the relationship between nations and individuals, as well as the diversity of positions and opinions.
- 2) The progression of Olympic History—marked by the growing number of participating countries and regions, as well as its ongoing hosting—encouraged examination from a chronological perspective.
- 3) Concrete anecdotes about athletes evoked students' empathy, serving as a catalyst to deepen understanding of diverse historical events. They also fostered interest in contemporary issues and cultivated a proactive attitude toward problem-solving.

These findings demonstrate that using Olympic History as a subject in comprehensive history education enriches lesson design by connecting historical understanding with contemporary issues.

Keywords: Modern and Contemporary History, Olympic History, KH Coder, High School

要 旨

2018年の学習指導要領改訂に伴い、高等学校地理・歴史科に必修科目「歴史総合」が新設された。この科目では、日本史と世界史を統合的に学ぶ点や、現代的な諸課題と関連づけて歴史を学ぶ点が期待されている。一方で、問いの設定や資料の選択に対して、教師が不安を感じていることも指摘されている。したがって、実践研究の蓄積が求められている。本研究は、「歴史総合」における教材としてオリンピック史を取り上げ、その可能性を検証することを目的とする。オリンピックは、生徒にとって身近で親しみやすい一方、時間的・空間的な広がりを持ち、近現代史の諸事象と深く関連している。また、結論の容易に出ない現代的諸課題を内包しており、探究的な学びを促す教材として適していると考えられる。本研究では、高等学校第2学年175名を対象に、3時間単元の「歴史総合」の授業を実施した。そして、授業終了後に生徒が記述したワークシートを、KH Coderを用いた計量テキスト分析によって学びの様相を検討、考察した。

分析の結果、オリンピック史の教材としての可能性として以下3点が見出された。

- 1) 国家間の対立と選手個人々の行動が併存するオリンピック史の特徴が、国と個人の関係性や立場・意見の違いに対する多角的な考察を促していた。
- 2) 参加国・地域の増加と継続的な開催というオリンピックの歴史的推移が、時系列的な視点からの考察を促していた。
- 3) 選手の具体的なエピソードが生徒の共感を喚起し、それを契機として多様な歴史的事象への理解が深まり、現代的諸課題に対する関心と課題解決に向けた主体的態度が育まれていた。

以上の知見は、歴史総合においてオリンピック史を題材とすることが、歴史的理解と現代的課題の接続を図る授業設計に資することを示している。

キーワード：歴史総合、オリンピック史、KH Coder、高等学校

目 次

- はじめに
1. 方法
 - 1.1 対象と時期
 - 1.2 授業の概要と手立て
 - 1.3 研究方法
 - 1.4 分析方法
 2. 結果
 - 2.1 自由記述における頻出語句
 - 2.2 頻出語の共起ネットワーク
 - 2.3 頻出語の使用文脈
 3. 考察
 - 3.1 個人と国家を往還する多角的思考
 - 3.2 過去と現在の比較を通した歴史的推移の把握
 - 3.3 歴史的事象への理解を基盤とした現代的諸課題への主体的関わり
おわりに

はじめに

2018（平成30）年に改訂された高等学校学習指導要領において、地理歴史科の必修科目「歴史総合」が新設され、2022（令和4）年度より全国の高等学校で導入された。本科目の大きな特徴は、以下の4点に集約される。第一に、従来の日本史・世界史の枠組みを超え、近現代史に焦点を当てながら日本と世界を相互的視野から捉える点。第二に、歴史的事象を現代的な諸課題と関連づけて学ぶ点。第三に、生徒自身が資料を活用しながら主体的に学ぶ点。そして第四に、歴史的なものの見方・考え方を育むために、多面的・多角的に考察する点である。

特に、日本史と世界史の関連づけは、1989（平成元）年の学習指導要領改訂以来、今日に至るまで一貫した課題であり、「歴史総合」は「明治以来の日本教育史上初めて、日本と世界の歴史を統合して、歴史的なものの見方・考え方を自覚的に学ぶことを目標に設定した、画期的な科目」（小川，2022）と評価されている。

しかしながら、実践に際してはいくつかの課題も指摘されている。例えば、学習の出発点となる問いの設定や、主体的な学びを支える資料の選定については、これまで以上に各学校や担当教員に委ねられている。また、学習内容が広範にわたる一方で履修単位は2単位にとどまっており、限られた授業時数の中で生徒主体の学習活動を展開しながら、必要な内容を十分に扱うことの難しさも指摘されている（山川，2023）。このように、学習進度や授業方法に関する不安の声は少なくなく、現場の教員にとって一定の負担となっているのが現状である。

こうした課題は、実際の実践報告にも表れている。壱岐（2023）は、「生徒たちが戦争について主体的に学ぶこと」を到達目標に据え、戦争に関わる資料館をめぐる校外学習や映画視聴、グループによる調査・発表を軸とした実践の報告をしている。その中で、「他人が担当した範囲が頭に入ってこなかった」、「教員が普通に授業をおこなった方がよかった」といった生徒からの感想を紹介しており、生徒の主体性と知識習得の両立が課題となっていたことがうかがえる。また、勝部（2023）は、「歴史総合」を担当する中で、「教員の専門性（日本史あるいは世界史）の問題、2

単位科目という時間的制約、授業内容と習得させる知識の精選など、実地的な問題」に直面したと述べている。そのうえで、これらの克服を目指し、解説動画と予習プリントを用いた「通史学習」と、「民主主義が拡大した大衆社会は、いかにして『民主主義の危機』へ傾いていったのか」という「単元を貫く大きな問い」に取り組む「主題学習」とを組み合わせた授業を構想・実践している。そして、生徒からは好意的な反応が多く寄せられた一方で、日本史と世界史のバランスや関連づけに課題が残ったことを報告している。

したがって、「歴史総合」のねらいを実際の授業において具体化していくためには、実践研究の蓄積が不可欠といえる。とりわけ、教材開発や学習活動の設計に関する検討は、授業改善に直結する重要な課題となる。その一例として、オリンピック¹⁾の歴史を教材とした授業実践は、以下の理由から「歴史総合」の四つの特徴を具体化するうえで適していると考えられる。

まず、生徒にとって身近な題材であることから、学習への関心を引き出しやすく、主体的な問いの設定を促す契機になると考えられる。さらに、政治・経済・社会・文化の諸側面にわたる現代的課題を内包しており、容易に結論の出ない問いを通して、多面的・多角的な考察を促すことが期待される。加えて、近現代の諸事象との関連性も深く、人種差別、ジェンダー、経済成長と格差、冷戦構造、地域紛争、難民問題など、歴史的背景と現代的課題を往還しながら学ぶことが可能であると考えられる。また、IOC創設から130年を経た現在、オリンピックは14か国から始まり200以上の国・地域へと拡大しており、時間的・空間的な広がりをもつ国際的事象として、日本と世界の相互的視野を育む教材となり得る。そして、映像、新聞記事、統計資料など、資史料の種類も豊富であり、生徒が資史料をもとに主体的に考察する活動を展開するうえでも資する可能性がある。

ただし、こうした教材の価値が即、生徒の主体的な学びを保障するわけではない。野々山(2023)は、「問いを抱くことは、確かに歴史学習を『自分ごと』として捉えていくために有効」であるとしつつも、「ただ漠然とした『問いを抱いてみよう』との発問では十分な効果は得られない」と指摘している。そのうえで、「生徒が自分自身の問いを抱くことを求めた授業事例」を紹介しながら、「①生徒自身の価値観を揺さぶる②現代的諸課題と生徒を接続する③歴史的な事象と生徒を接続する」の三点を「歴史総合発問原則」として提示し、これらの原則と、それを活用できる資料の存在が不可欠であると述べている。また、桑原・紙田(2025)は、当事者性という概念への検討を踏まえ、問題への当事者性を保障するためには、「問題の当事者への共感的理解とその問題に関わる当事者としての認識が必要となる」と述べている。これらの視点は、オリンピックを教材とする授業を設計するうえで、重要な示唆を与えるものである。すなわち、先行研究で示された授業の手立てを踏まえつつ、それらを具体的な授業実践に落とし込み、生徒の学びの様相を分析することによって、教材としてのオリンピックの可能性を検討することが本研究の課題である。

従来、オリンピックを教材とした学習については、「オリンピック・パラリンピック教育」という文脈から、体育・保健体育科の他、総合的な学習の時間や道徳科において研究が行われてきた(宮崎・村瀬, 2023; 佐々木, 2019)。これらの研究は、オリンピックという教材が児童・生徒の学習意欲を喚起することを示唆しているが、地理・歴史科に関わる実践については、オリンピック・パラリンピック教育の研究においてほとんど言及されていない。

また、オリンピックを教材とした「歴史総合」の授業提案としては、石川(2020)が「三つの東京オリンピック」を扱った実践案を提示している。これは、「歴史総合」の学習内容を構成する四つの大項目のうち、大項目A「歴史と扉」の中項目1「歴史と私たち」に該当する2時間の授業であり、それぞれの大会の開催目的と当時の日本社会の課題を関連づけながら、国家イベントと

してのオリンピックの役割や社会的影響を考察する構成となっている。ただし、あくまでも授業案の提示にとどまっており、実践や生徒の学びの分析には踏み込んでいない。本研究の意義は、オリンピックを教材とした授業を実施したうえで、生徒の学びの様相を分析し、教材としての可能性を検討する点にある。

以上を踏まえ、本研究では、高等学校第2学年を対象としてオリンピックを教材とした「歴史総合」の授業を実施し、授業後に生徒がワークシートに記した自由記述をもとに、学びの様相を分析する。特に、現代的諸課題の解決に向けて、生徒がどのような歴史的事象を手がかりに、どのような思考を展開したのかに注目することで、「歴史総合」における教材としてのオリンピックの可能性を考察する。

なお、現在、オリンピックはパラリンピックと同一都市・同一年度に開催されており、両者を包括して「オリンピック・パラリンピック」と捉えることが一般的になりつつある。しかし、歴史的にみれば、両大会はその成り立ちや理念、扱う課題の性質において異なる側面を有しており、本研究では、扱う内容や観点が多岐にわたることを避けるため、オリンピックに焦点を当てて検討を行った。

1. 方法

1.1 対象と時期

本研究の対象は、2024年2月9日から16日にかけて実施された、オリンピックを教材とする3時間単元の「歴史総合」の授業を受講した、関東圏内A高等学校第2学年5学級の生徒である。在籍していた192名のうち、同意および回答が得られた175名を対象とした。なお、対象生徒はいずれもオリンピックが夏季・冬季それぞれ4年ごとに開催され、多様な競技・種目が実施されていることについては共通して理解していた。また、直近の夏季オリンピックである東京大会については、自国開催であったこともあり、大半の生徒が少なくとも一つ以上の種目を視聴していた。一方で、オリンピックが「平和の祭典」と呼ばれていることやその歴史的背景、政治・社会との関係性については理解していない生徒が多く、オリンピックを単なるスポーツの競技大会として捉えている傾向がみられた。

1.2 授業の概要と手立て

本単元は、「歴史を通してオリンピックを分析しよう」という主題のもと、大項目C「国際秩序の変化や大衆化と私たち」、およびD「グローバル化と私たち」に関連づけて構成された、3時間構成の授業である。以下では、表1に示す授業構成について、補足的に説明する。

第1・2時限目では、ジグソー法を用いた協働的な学習を展開した。第1時限目の導入では、「オリンピックの開催都市」や「参加国（地域）数・選手数の推移」に関する資料を用いて、オリンピックの歴史的変遷と国際的広がりを概観した。この導入では、開催都市が欧米に偏っていることや、戦争の影響を受けながら大会が展開されてきたことに着目させた。これにより、「オリンピックは本当に平和の祭典といえるのか」という価値観を揺さぶる問いを生成し、生徒自身の問題意識を喚起した。

その後、生徒は「A: オリンピック×対立」、「B: オリンピック×差別」、「C: オリンピック×第3世界」の三つのテーマに分かれてエキスパート活動を行い、各自が担当テーマに関する資料を読み解いた。例えば、「A: オリンピック×対立」では、1980年モスクワ大会のボイコットに関する

表1 授業の概要

| 時限 | 方法 | 内容 | 大項目 | 中項目 |
|----|--|--|---------------------------------|---|
| 1 | 共通 | 資料①「夏季オリンピックの開催都市」 資料②「参加国(地域)数・選手数の推移」 Q: オリンピックは「平和の祭典」か? | C | (4)「国際秩序の変化や大衆化と現代的な諸課題」 |
| | ジグソー | A「オリンピック×対立」 資料A-①「国別獲得メダル数の推移」 資料A-②「1980年モスクワ大会ボイコットに関する新聞記事」 | D | (1)「グローバル化への問い」 (2)「冷戦と世界経済」 |
| | | B「オリンピック×差別」 資料B-①「女子競技数の推移」 資料B-②「ブラックパワーサリュート」 | C | (4)「国際秩序の変化や大衆化と現代的な諸課題」 |
| | | D | (2)「冷戦と世界経済」 | |
| D | C「オリンピック×第3世界」 資料C-①「アフリカの年代別オリンピック新規参加国数」 資料C-②「新興国で根付かない五輪文化」 | D | (2)「冷戦と世界経済」 (3)「世界秩序の変容と日本」 | |
| 2 | ジグソー | A「オリンピック×対立」 | D | (1)「グローバル化への問い」 (2)「冷戦と世界経済」 |
| | | B「オリンピック×差別」 | C | (4)「国際秩序の変化や大衆化と現代的な諸課題」 |
| | | D | (2)「冷戦と世界経済」 | |
| | D | C「オリンピック×第3世界」 | D | (2)「冷戦と世界経済」 (3)「世界秩序の変容と日本」 |
| 共通 | ①「オリンピックが抱えてきた課題とははなにか!」 ②「平和の祭典オリンピックは本当に平和に繋がっているのだろうか?」(個人→グループ) | D | (4)「現代的な諸課題の形成と展望」 | |
| 3 | 講義 | 1. アパルトヘイトとオリンピック ・IOCによる南アフリカの排除 ・1976年大会におけるボイコット問題とソウェト蜂起 ・1984年大会とゾーラ・バッド(陸上競技女子3000m) ・1992年大会の女子10000mにおけるウイニングラン | D | (2)「冷戦と世界経済」 (3)「世界秩序の変容と日本」 (4)「現代的な諸課題の形成と展望」 |
| | | 2. 国家間対立とオリンピック ・1972年大会男子バスケットボール決勝における米ソ対決 ・旧東ドイツの国家的ドーピング ・2008年大会における射撃女子エアピストルと南オセチア紛争 ・2014年ソチ大会とクリミア半島侵攻、ウクライナによる抗議 | | |
| | | 3. 難民とオリンピック ・2012年大会とグオル・マリアル(男子マラソン)、南スーダン(映画「戦火のランナー」) ・2016年大会における難民選手団 | | |

新聞記事などを用い、政治的影響を受ける選手への共感を喚起することで、歴史的な事象と生徒の接続を図った。また、国別メダル獲得数の推移を示す資料を通じて、スポーツが国家間対立の道具となっている側面に気づかせるとともに、スポーツを観る側の姿勢もこの問題に関わっているという、当事者性を持たせる手立てを講じた。

第2時限目では、エキスパート活動の成果をグループ内で共有し、オリンピックが抱えてきた課題について多面的に整理したうえで、「平和の祭典オリンピックは本当に平和に繋がっているのだろうか」という問いについて考察を深めた。なお、ジグソー法を用いた「歴史総合」の授業実践としては、古澤(2025)が報告を行っており、「生徒のふりかえりや授業中のいきいきとした活動からは、生徒たちが主体的に探究しているようすがうかがえた」と述べている。本研究の授業に

においても、対話的な学びを通じて、生徒が多面的な視点から問題解決に向けて考察することを期待した。

第3時限目では、専門家による講義を通じて、生徒の視野を広げる機会を設けた。「アパルトヘイト」、「国家間対立」、「難民」といった観点から資料を提示し、それぞれの事例に対する歴史的背景と現代的課題について解説を行った。この講義では、政治的な問題とオリンピックの関連について話しつつ、具体的な選手のエピソードを紹介することで、個人の経験（マイクロ）と国際的な構造（マクロ）を行き来する多角的な視点からの考察を促すとともに、選手への共感を喚起し、歴史的な事象や現代的な課題との接続を意図した。なお、ここで用いられた教材は新聞記事や映画のプロモーション映像など、一般に入手可能な資料を中心に構成されており、特別な専門的知見に依存するものではない。したがって、現場の教員が授業を構想・実施する際にも、十分に参考にし得る内容であると考えられる。

1.3 研究方法

本研究では、ワークシートによる自由記述を分析対象とした。対象の生徒に対し、単元終了後に、「平和の祭典オリンピックは平和に繋がっているのか。どうなっていけばいいか。どこに平和を見出していけばよいのか。3時間を通して考えたこと、獲得したことを踏まえて書いてください」という問いを提示し、自由に記述してもらった。

自由記述の収集に際しては、事前に生徒および保護者に対して、研究の目的と内容を説明し、協力は任意であること、記述内容が成績等に一切影響しないことを明示した。また、記述内容から個人が特定されることはなく、研究への協力はいつでも撤回可能である旨を伝え、同意を得たうえで実施した。なお、本調査は、所属機関の学術研究倫理審査委員会の承認（受付番号：2023-04）を得て実施した。

1.4 分析方法

収集したワークシートに対しては、テキストデータを統計的に分析するためのソフトウェア「KH Coder」(ver. 3)を用いて、計量テキスト分析を行った。計量テキスト分析とは、「計量的分析手法を用いてテキスト型データを整理または分析し、内容分析（content analysis）を行う方法」と定義されており、「分析者のもつ理論や問題意識によるバイアスを明確に排除できる」こと、「分析の客観性ないしは信頼性が向上している」（樋口、2020）ことなどが利点としてあげられている。本研究では、生徒による自由記述をテキストデータとして用い、授業を通じた生徒の学びを解釈するために、語句の使用傾向を客観的に抽出可能な計量テキスト分析を適用した。また、本研究の対象人数は175人であり、テキストデータとして一定の量的厚みをもつことから、語句の傾向を統計的に把握するうえで適していると判断した。

具体的な分析手順は以下の通りである。第一に、「抽出語リスト」を作成することで、ワークシート内で頻繁に使用された語句を明らかにした。この際、出現回数18回以上を「頻出語」の一つの目安とした。これは、対象者数175名のうち、おおよそ10%以上の生徒が言及した語句に相当する水準である。さらに、着目すべき語句が含まれているか、また対象語句が過剰になりすぎないかといった観点も踏まえ、共同研究者間の協議を経て、頻出語の範囲を決定した。第二に、「共起ネットワーク」を用いて、頻出語が他の語句とどのように共起していたのかを分析した。この際、対象とする品詞の選定については、授業の目標や内容との関連から重要と考えられる品詞を、共同研究者間の協議により決定した。また、除外する語句や描画数の設定については、複数の設

定値で探索的に分析を行い、注目すべき語句の共起関係が明瞭に可視化されるよう、共同研究者間で協議のうえ調整した。第三に、「KWIC (keyword in context) コンコーダンス」を用いて、頻出語がどのような文脈で使用されていたのかを明らかにした。ここでも、共起ネットワークにおけるどのグループに注目するのかについて、共同研究者間で協議のうえ決定した。その後、第一著者が語句の使われ方や前後の文の流れを踏まえて内容を解釈し、類似した内容ごとに分類した。さらに、第二著者・第三著者との協議を経ることで、分析の妥当性と信頼性を確保した。

2. 結果

2.1 自由記述における頻出語句

まず、生徒の自由記述から作成したテキストデータを「KH Coder」に読み込み、前処理を実行して単純集計を行った。その際、表記ゆれの統一に加え、語句の抽出精度を高めるために、特定の語句（人物名など）が一語として抽出されるよう、強制抽出語の設定を行った。

その結果、「総抽出語数」は30,855語、「異なり語数」は1,752語であった。また、助詞や助動詞などの機能語を除外し、分析に使用する語句に絞った「総抽出語数（使用）」は12,367語、「異なり語数（使用）」は1,455語となった。

続いて、前処理済みデータから抽出語リストを作成し、語句の出現回数を確認した。その際、出現回数18回以上（対象者の約10%）を「頻出語」候補の目安としたうえで、先述の観点に基づく共同研究者間の協議を踏まえて、最終的に出現回数20回以上の語句を「頻出語」と定義した。表2に示すとおり、「差別」、「戦争」、「政治」、「対立」、「人種」、「格差」など、現代的諸課題や歴

表2 自由記述における抽出語句

| 抽出語 | 出現回数 | 抽出語 | 出現回数 | 抽出語 | 出現回数 | 抽出語 | 出現回数 |
|--------|------|-----|------|-------|------|-------|------|
| オリンピック | 637 | 関係 | 58 | 機会 | 33 | 講義 | 25 |
| 思う | 528 | 今後 | 58 | 起きる | 32 | 持つ | 25 |
| 平和 | 494 | 交流 | 56 | 競技 | 32 | 色々 | 25 |
| 国 | 366 | 休戦 | 54 | 個人 | 32 | 争い | 25 |
| 繋がる | 272 | 難民 | 53 | 平等 | 32 | 多く | 25 |
| 選手 | 225 | 知る | 50 | 徐々に | 31 | 受ける | 24 |
| 差別 | 165 | 対立 | 49 | 与える | 31 | 多い | 24 |
| スポーツ | 148 | 人種 | 46 | すべて | 30 | ドーピング | 23 |
| 考える | 145 | 開催 | 45 | 格差 | 30 | 考え | 23 |
| 人 | 117 | 出場 | 44 | 影響 | 29 | 期間 | 22 |
| 問題 | 114 | 人々 | 43 | 現在 | 29 | 起こる | 22 |
| 同士 | 110 | 世界中 | 43 | 自分 | 28 | 黒人 | 22 |
| 世界 | 101 | 行う | 42 | 変わる | 28 | 授業 | 22 |
| 戦争 | 101 | 大会 | 42 | 出る | 27 | 違う | 21 |
| 政治 | 79 | 解決 | 37 | 友情 | 27 | 増える | 21 |
| 参加 | 78 | 場 | 37 | 少し | 26 | 必要 | 21 |
| 今 | 73 | 年 | 37 | 昔 | 26 | お互い | 20 |
| 平和の祭典 | 69 | 感じる | 36 | 大切 | 26 | 過去 | 20 |
| 見る | 59 | 見出す | 36 | 南アフリカ | 26 | 部分 | 20 |

史的事象に関する語句が含まれていた。また、「過去」、「今」、「今後」といった時制や「徐々に」、「変わる」といった歴史的推移を示す語句も確認された。

2.2 頻出語の共起ネットワーク

先述の頻出語が他の語句とどのように共起しているのかを明らかにするため、共起ネットワークを作成した。なお、共起ネットワークの作成にあたっては、出現回数が極端に多い語句（200回以上）を対象から除外した。これらの語句は文脈を問わず頻繁に使用される傾向があり、探索的な分析の過程で、ネットワーク構造を過度に集中化させることが確認されたためである。

また、先述した共同研究者間の協議を経て、分析対象の抽出品詞は、「名詞」、「サ変名詞」、「副詞可能」、「副詞」、「副詞B」とし、描画数は「KH Coder」のデフォルト値である60とした。その結果、共起関係にある語句が34描出され、2-8語で構成される9個のグループが生成された（図1）。

本研究では、これらのグループのうち、「今・昔・今後」、「徐々に・講義・格差」、「差別・同士・対立・関係・人種」の3グループに焦点を当てて分析を行った。これらのグループは、生徒が歴史的事象を現在や未来と接続しながら捉えている様子や、現代的諸課題への関心を示しており、授業のねらいと深く関連していると考えられるためである。

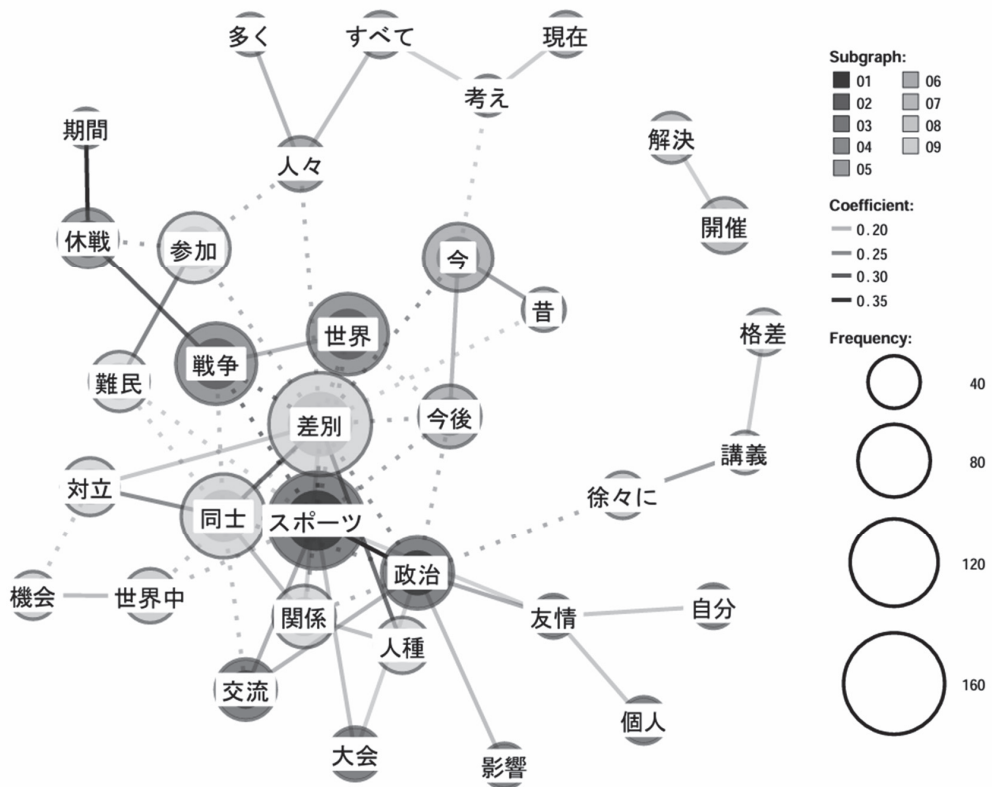


図1 自由記述における頻出語の共起ネットワーク

2.3 頻出語の使用文脈

先述した3グループについて、頻出語がどのような文脈で用いられていたのかを明らかにするため、「KWIC (keyword in context) コンコーダンス」を用いて、生徒の具体的な記述内容を分析した。

表3 「今・昔・今後」グループの記述例

| |
|---|
| ①歴史的課題への理解と現在の変化への評価 |
| <p>●女性差別、人種差別が「昔」は起きていたが、「今」では改善してきている。また、難民のための難民選手団という支援が行われている。時代が進むにつれて多様化が認められ、争いが減り、すでに平和を見出していると考えられる。</p> <p>●「今」のオリンピックは「昔」と比べてかなり平和に繋がってきていると思います。1992年のバルセロナ大会で(中略)選手が手を取り合いながらウイニングランをしたように(中略)すべての競技で差別等がなくなり、試合が終わったら皆仲間といった平和的な考えがさらに広まれば、「今」よりもっと平和の祭典という名にふさわしい大会が開催できるのではないかと考えました。</p> |
| ②残存する課題へのまなざしと未来への願い |
| <p>●「今後」も、選手や観客が一体となって、オリンピックをつくってあげたいと思った。でも、「今」はまだ危険な状況にある。歴史とは過去に起きた過ちを知り、同じことを起こさないために学ぶのだとよく聞かすが、本当にそれができているか疑問に思う。「昔」、オリンピックで特定の国を出場させないという差別的なことが起こった。その後このことはなくなったが、「今」まさに同じようなことが起きようとしている。これは、自分がよければいいという考えがあるからだと思うから、オリンピックでも他者を尊重できるようになればいいと思う。</p> <p>●オリンピックは「今後」、「今」よりもっと他国との交流を深め、お互いより深く知る場にしていくべきだと思います。また、国による差をなくすことが大事だと思います。国によって貧困なところは練習環境が不十分だったり栄養を十分に摂取していなかったりするので、貧富の差による国のメダル獲得数の違いにも目を向けてみるのもよいと思います。</p> |

注：グループを構成する頻出語は括弧で囲んだ。

表4 「徐々に・講義・格差」グループの記述例

| |
|--|
| ①授業を通じた認識変容 |
| <p>●ジグソー活動で学んだ「格差」や差別の問題、「講義」で学んだ国同士の冷戦や戦争での問題など、平和や平等とはほど遠いかのように思われる。しかし私は、「講義」の中で見た、国や人種が違う選手たちが笑顔で手を繋いでいたり互いを称え合っていた写真が忘れられなかった。そういった選手同士の中に平和や平等が見出せるし、平和に繋がる第一歩なのではないか。</p> <p>●最初の2コマだけで見るとオリンピックは平和の祭典と呼ばれている割には、黒人への差別や経済「格差」による国と国の「格差」、それに加えて戦争もこのオリンピックに関係しているところがあり、平和に繋がっていないのではないかと考えていたが、3コマ目の「講義」を聞き(中略)スポーツというもので世界に一体感を持たせようとする、そういった動きも実際行われていると知り、最初は繋がっていないと思っていた平和に力は弱いが「徐々に」繋がってきているのではないかと考えました。</p> |
| ②歴史的推移を踏まえた平和への願い |
| <p>●差別や「格差」などは、たくさんの方に関わってくる問題だから、「徐々に」でもよくなっていけばいいと思う。ロンドンオリンピック閉会式の、第4代会長のいうように、世界中の若者が地球上の人類はみな兄弟であることを気づかせてくれる機会を与えることはできると考えられる人が多くなっていくことが大切だと思う。</p> <p>●平和の祭典オリンピックは平和に繋がっていると思う。最初の方は政治的なことをオリンピックに持ち込んで差別や「格差」が生まれていたが、開催する度に、「徐々に」国の距離や人の距離が縮まっているように感じたからである。だが、今でも国によってオリンピックへの認識の違いや国のお金の差があり、まだ平等とは言えない状況にあると思う。</p> |

注：グループを構成する頻出語は括弧で囲んだ。

分析に際し、同一グループに属する頻出語が2語以上含まれている記述を抽出し、内容の類似性に基づいて分類を行った。その結果を表3-表5に示す。

まず、「今・昔・今後」グループでは、人種や性に関する差別といった歴史的事象への言及がみられた。これに関連して、現在の状況を肯定的に捉える記述や、なお残る記述に対して批判的に言及する記述も確認された(表3)。

次に、「徐々に・講義・格差」グループでは、オリンピックと平和との関係に対する認識の変容に関する記述が確認された。また、差別や格差といった課題の歴史的推移に触れながら、今後のオリンピックに期待を寄せる記述も含まれていた(表4)。

そして、「差別・同士・対立・関係・人種」グループは、国際的な対立や人種差別といった課題に言及する一方で、個人間の交流や相互理解に触れながら、平和との関連性を示唆する記述もみられた。また、現在も残る差別や対立に対して問題意識を示す記述や、過去から現在に至る変化に言及し、将来への展望に触れる記述も含まれていた(表5)。

以下では、この結果をもとに、授業における生徒の学びについて考察を加える。

表5 「差別・同士・対立・関係・人種」グループの記述例

| |
|--|
| <p>①国際的対立を超えた個人間の交流と相互理解</p> <p>●国「同士」の問題はスポーツには「関係」ないという態度で参加している人、難民であろうと黒人白人だろうとオリンピックで戦っているのは国「同士」ではなくて、一人一人の同じ人間なんだと感じている人もいて、そうやって考えていけばオリンピックは平和に繋がっていくのではないかと思う。</p> <p>●確かに国「同士」の争いが絶えない中、「人種」「差別」などに悩まされている人も多くいて、世界中の人が集まるとどうしても差というもの大きく知られてしまいます。ですが、中でも例えば紛争中の敵「同士」でもスポーツで戦うことで生まれる友情のようなものはあると思うし、それを世界発信することで、様々な人の考え方をよくも悪くも変えることができます。</p> |
| <p>②残存する課題への認識と解決に向けた模索</p> <p>●徐々に国「同士」の「関係」がよくなったり「差別」的な思考が減ったりしたとしても、まだ今は、平和の祭典であるとは言い難い。だからこそオリンピックは続けるべきで、そう簡単なことではないと思うけれど、スポーツを通し、各国の選手たちがよい「関係」を築き、互いに尊重し合えば、国「同士」の「関係」も良い方向に向かい、平和に繋がるのではないだろうか。</p> <p>●IOC代表の言葉のとおり、若者たちに人類はみな兄弟であるということを感じさせる機会を与えることはできていると思うけど、「対立」している国の選手「同士」が仲良くなっても実際にその国「同士」の「関係」性が大きく変わることはない。オリンピック休戦でも期間を守らない国があるため、今後は戦争中の国は出場させないなど厳しい決まりが必要だと思った。</p> |
| <p>③歴史的課題を踏まえた現在の変化と将来の展望</p> <p>●過去には、ドーピングの強要や国家間の「対立」、「人種」「差別」など平和とは言えない出来事が多く起こっていたが、今ではまだ完全な改善がなされていないが、難民選手団の結成や選手たち「同士」の称え合いなど平和に向かっていることがわかる。スポーツを通して、各国が互いに切磋琢磨し世界中が少しでも平和に向かえばいいなと思いました。</p> <p>●オリンピックは歴史上数々の「差別」が見られてきたが、現在では平和に近づいていっていると思う。しかし、今はよくても、過去に起こった黒人・「人種」・国籍・性別などの「差別」はなくならない。だからこそ、過去の過ちを一人一人が自覚して、相手を認め合い、尊重できるような今をつくるべきだと思った。</p> |

注：グループを構成する頻出語は括弧で囲んだ。

3. 考察

3.1 個人と国家を往還する多角的思考

生徒のワークシートに記された文章には、国家間の対立や政治的緊張といったマクロな社会背景を踏まえつつ、選手個人の姿勢や交流に焦点を当てるミクロな視点も多くみられた。「平和の祭典オリンピックは平和に繋がっているのか」、「どこに平和を見出していけばよいのか」といった問いに対して、戦争や差別の残存といった現代的諸課題に疑問を呈しながら、選手の行動や交流の中に希望を見出す記述が複数確認された。これは、単一の視点からの考察ではなく、複数の視点を行き来しながら平和の可能性を探ろうとする多角的な思考の表れと解釈できる。

さらに、注目すべきは、個人の交流や友情が国際関係に影響を与える可能性への認識や期待が含まれている点である。スポーツを通じて生まれる相互理解や尊重の態度が、国家間の関係改善につながるという視点は、現代的諸課題に対する個人の役割への認識、換言すれば当事者性の喚起ともいえる。国家という抽象的な枠組みと、個人の具体的な行動や感情との接点を捉えようとする態度は、社会と主体の関係性に対する認識の深化を示している。この点は、歴史的事象を通じて現代的諸課題に向き合う「歴史総合」の学びにおいて、重要な意味をもつ。

こうした学びを可能にした要因として、授業における映像資料や具体的エピソードの提示があげられる。国籍や文化的背景の異なる選手たちが互いを称え合う場面を視覚的に捉えることで、抽象的な理念としての平和や共生が、具体的な行動として実感や共感をもって理解されていたと考えられる。これにより、生徒は国家という抽象的な枠組みを超えて、個人の行動に意味を見出す視点を獲得し、社会と主体の関係性を捉える思考を形成していったと推測される。

3.2 過去と現在の比較を通した歴史的推移の把握

生徒の記述から、過去のオリンピックにおいてみられた差別や政治的対立といった歴史的事象を踏まえながら、現在の状況との比較を通じて変化の兆しを捉えようとしていたことが確認された。「昔は女性差別や人種差別があったが、今では改善されてきている」、「難民選手団の結成など、多様性を認める動きが進んでいる」といった記述は、歴史的事象を単なる過去の出来事としてではなく、現在との連続性の中で理解しようとする態度を示している。

また、こうした歴史的推移を踏まえたうえで、未来への展望を描こうとする態度もみられた。過去の差別や対立を学びながら、現在に至るまでの改善点と残存する課題を見極め、今後のオリンピックがより平和的な祭典となることを願う態度は、時間軸に基づく思考力や判断力の育成にも寄与していると考えられる。

こうした学びは、オリンピックという教材の特性に関わっていると考えられる。オリンピックは、19世紀末から現在に至るまで、社会的・政治的背景と密接に関連しながら継続的に開催されてきた国際的イベントであり、その歴史には理念と現実との乖離が繰り返し刻まれている。平和の祭典という理想を掲げながらも、オリンピックは差別や対立、戦争の影響を受けてきただけでなく、時にそれらを助長し、政治的緊張を顕在化させる場にもなっていた。そのような歴史は、生徒にとって歴史的推移を具体的に捉える手がかりとなり、過去・現在・未来をつなぐ素材として一定の役割を果たしたと考えられる。

3.3 歴史的事象への理解を基盤とした現代的諸課題への主体的関わり

生徒の記述から、差別や対立といった歴史的な事象を具体的に理解したうえで、現在の状況を評価し、残存する課題に対して自らがどう関わるべきかを考えようとする態度が読みとれた。「過去の過ちを一人一人が自覚して、相手を認め合い、尊重できるような今をつくるべきだと思った」、「貧富の差によるメダル獲得数の違いにも目を向けるべき」といった記述には、歴史的な理解を踏まえたうえで、現代的な諸課題に対して自らの立場から応答しようとする態度が表れている。

こうした記述は、単なる知識の獲得や現状認識にとどまらず、社会的な課題に対して自分自身はどう関わるかを考える態度、すなわち主体的態度の高まりを示している。「今はまだ危険な状況にある」、「本当に過去から学んでいるのか疑問に思う」といった表現には、現実への批判的なまなざしとともに、解決に向けて行動を起こすべきだという主体的な態度が含まれている。生徒は、歴史的な事象を通して現代社会の矛盾や課題に気づき、それを自身に関わる課題として引き受けようとしていたと解釈できる。

こうした態度形成をもたらした要因として、これまでに述べてきたオリンピックの二つの特性があげられる。一つは、差別や対立が顕在化する場としての側面である。理念として平和を掲げながらも、政治的緊張や矛盾が露呈する場となってきたオリンピックの歴史に触れることで、生徒は現状への批判的なまなざしを獲得していたと考えられる。二つ目は選手個人々のエピソードが共感を醸成する具体性をもっていた点である。国籍や文化的背景を超えて互いに称え合う姿や、困難を乗り越えて出場する選手の姿に触れることで、生徒はその課題を他人事ではなく自分事として引き受けようとする態度を形成したのではないか。このように、現代的な諸課題の根深さや複雑さと個人の物語が交差する教材に触れたことで、歴史的な理解を基盤とした現代的な諸課題への主体的態度が育まれていったと考えられる。

おわりに

本研究は、高等学校「歴史総合」における教材としてのオリンピックの可能性を、生徒の自由記述に対する計量テキスト分析を通して検討してきた。分析結果と考察に基づき、以下の3点を提示する。

第一に、現代的な諸課題に対する多面的・多角的な思考を促すという点である。生徒の記述には、国家間の対立や政治的緊張といったマクロな社会背景と、選手個人の姿勢や交流といったミクロな視点を往還しながら、平和の可能性を探ろうとする思考がみられた。これは、政治・経済・文化など多様な側面に関わる課題を顕在化させる場であると同時に、個人の具体的な行動や感情が可視化される場でもあるという、オリンピックの二面性によって促された思考であると考えられる。

第二に、歴史的な事象と現在、未来を接続する思考を育む点である。生徒は、過去の差別や対立といった歴史的な事象を踏まえ、現在との比較を通じて変化の兆しを捉えようとしていた。オリンピックは、社会的・政治的背景と密接に関わりながら継続されてきた国際的なイベントであり、その歴史には、平和という理想と現実との乖離が繰り返し刻まれている。こうした歴史的な特性に触れることで、生徒が過去・現在・未来をつなぐ時間軸に基づいた視点を獲得し、歴史的な推移を具体的に捉える思考を育んでいたと考えられる。

第三に、現代的な諸課題に対する主体的な関わりを促す点である。差別や格差といった課題を他人事ではなく自分事として引き受けようとする姿勢は、選手の具体的なエピソードへの共感を通じて育まれていたと解釈される。また、それを可能にしたのが、映像資料や新聞記事、統計デー

タなど、オリンピックに関わる多様な資史料の活用である。

以上のように、オリンピックは「歴史総合」の教材として、歴史的事象や現代的諸課題に対する興味の喚起、多面的・多角的な考察、資史料を活用した主体的な学びなど、複数の観点において一定の役割を果たし得る可能性を示した。なお、本研究では生徒の自由記述をもとに学びの様相を明らかにしたが、知識の定着や理解の深化といった学習成果については、今後、客観的な検証が求められる。また、オリンピックを教材とすることが、他の大項目等における学習内容にも適用可能であるのかという点についても、さらなる検討が必要である。加えて、パラリンピックをはじめとする他の国際的な競技大会を含めた教材開発や、その教育的効果の検証についても、今後の課題としたい。

注

- 1) 本研究においては、特定の大会や競技そのものではなく、近現代におけるオリンピックの歴史的展開を教材として扱った授業実践を分析対象としている。本文中では冗長な表記を避けるため「オリンピック」と表記しているが、ここでの「オリンピック」は、その歴史的展開を指している。

参考文献

- 古澤美穂 (2025) 「国家と国旗から考える国民国家とナショナリズム——『歴史総合』における主体的・対話的で深い学びの模索——」『大阪教育大学附属高等学校池田校舎研究紀要』第57巻, 45-57ページ.
- 樋口耕一 (2020) 『社会調査のための計量テキスト分析：内容分析の継承と発展を目指して』(第2版), ナカニシヤ出版.
- 壺岐 太 (2023) 「グループ学習と発表を軸とした, 高校1年生歴史総合の授業実践」『山川歴史PRESS』第15号, 11-15ページ.
- 石川照子 (2020) 「日本史(歴史総合) COVID-19パンデミック下で考える『三つの東京オリンピック』」『社会科教育』第57巻11号, 86-89ページ.
- 勝部舜也 (2023) 「通史学習と主題学習の両立した歴史総合の授業実践」『山川歴史PRESS』第15号, 6-10ページ.
- 桑原敏典・紙田路子 (2025) 「論争問題学習における『当事者性』を保障する授業設計——地理歴史科『歴史総合』小単元『紛争鉱物から考える私たちの社会』の開発を事例として——」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』第189号, 87-100ページ.
- 宮崎明世・村瀬 茜 (2023) 「中学校の道徳科授業におけるオリンピック教育教材の活用可能性」『日本教科教育学会誌』第45巻第4号, 23-36ページ.
- 文部科学省 (2019) 『高等学校学習指導要領(平成30年告示) 解説地理歴史編』東洋館出版.
- 野々山 新 (2023) 「生徒が自ら問いを抱くことを促す単元開きの発問」『社会科教育』第60巻5号, 86-89ページ.
- 小川幸司 (2022) 「はじめに」小川幸司・成田龍一編『世界史の考え方 シリーズ歴史総合を学ぶ①』岩波書店.
- 佐々木 浩 (2019) 「オリンピック・パラリンピック教育に関する実践的研究」『初等教育論集』第20巻, 57-67ページ.
- 山川志保 (2023) 「『歴史総合』で培う力—『歴史総合』を生徒はどう感じ, どのような力を身に付けたのだろうか? ——」『お茶の水女子大学附属高等学校研究紀要』第68巻, 129-143ページ.